新潟市平和推進事業

令和元年度

広島平和記念式典等派遣事業感想文集

新　潟　市

発行にあたって

新潟市では、平成17年10月10日に「非核平和都市宣言」を行い、環日本海の友好・交流の拠点都市として、世界の恒久平和と核兵器の不拡散・廃絶を願い、さまざまな平和推進事業を実施しています。

この平和推進事業の一環として､市内の各中学校や新潟大学のご協力により、毎年中学生と新潟大学の留学生を広島へ派遣しており、現地でしか感じることのできない原爆の被害や戦争の悲惨さ、平和の尊さについて深く認識してもらい、その体験を語り継いでいただいています。

今年度は、公募による市内中学2・3年生24名と、中国からの留学生2名、引率を含め総勢30名で「広島平和記念式典等派遣事業」を実施しました。

また、広島派遣に加え、新潟市内の戦争被害がもっとも大きかった8月10日に毎年行っている平和祈念碑献花式にも、派遣事業に参加した中学生と留学生に参加をしていただき、戦争当時の新潟市が原爆投下の候補地であり、一時は街から人が避難していなくなったことや、強制連行されあるいは捕虜となってきた外国の方々の多くも新潟の地で亡くなったことなどについて学習をしていただきました。

この度、当事業に参加された中学生・留学生の感想を報告文集としてまとめました。

この文集を通して、より多くの人から戦争の悲惨さ、平和の尊さを再認識していただくとともに、戦争の事実が風化することなく後世に語り継がれることを願っています。

目　次

１　日程表・参加者名簿　１、２

２　参加中学生による感想文

江口　弘幸（附属新潟中学校）３
乙川　今命（潟東中学校）……４
加藤　未奈（附属新潟中学校）５
小泉　駿介（新潟第一中学校）６
木浦　咲良（鳥屋野中学校）…７
小林　麗生（中野小屋中学校）８
小林　航己（附属新潟中学校）９
笹川　拓真（味方中学校）…１０
鈴木　結菜（高志中等教育学校）１１
須田　結心乃（曽野木中学校）１２
関口　未来莉（曽野木中学校）１３
高松　來未（曽野木中学校）１４
田島　生（新潟柳都中学校）……１５
冨岡　千春（葛塚中学校）……１６
中島　隆之介（附属新潟中学校）１７
中野　愛（高志中等教育学校）…１８
平山　芽依（高志中等教育学校）１９
広瀬　未侑（寄居中学校）……２０
本保　奏葉（新潟柳都中学校）…２１
丸山　心春（藤見中学校）……２２
山賀　優（巻西中学校）……２３
山本　麟太郎（附属新潟中学校）２４
渡辺　舞子（五十嵐中学校）……２５
渡部　莉子（新津第二中学校）…２６

３　参加外国人留学生（新潟大）による感想文

何　念【中国】　余　璐【中国】　２７、２８

４　新潟市非核平和都市宣言　２９

１　日程表・参加者名

令和元年度広島平和記念式典等派遣事業日程表

月日	内　　容（時間及び会場等）
8／5 （月）	新潟駅 →→→ ときP304号 →→→ 東京駅 →→ のぞみ21号 →→→ 広島駅 →→→ （貸切バス） →→ 06：30集合　（06：56発　09：00着）　（09：30発　13：26着）　※新幹線内で昼食 平和公園見学（ボランティアガイド付） →→→（徒歩）→ 広島平和資料館見学 →→→→（徒歩）→ （貸切バス） →→ 14：10 ～ 15：10　15：30～17：45 ホテル（チェックイン・荷物預け） →→→→ 夕　食 →→→→→ ホテル 18：20 ～ 19：10　19：20 ～ 20：00　20：10頃 【宿泊：ホテルビスタ広島】
8／6 （火）	ホテル →→→→→→→→→→→→→（徒歩）→ 平和記念式典参列　8:00～8:50 →→→→→→→→→（徒歩）→ 06：00朝食　06：40出発（※制服）　07：00会場入 原爆被害者証言のつどい →→→→→→ 昼　食 →→→→→→ ワークショップ →→→（徒歩）→ 10：00 ～ 12：00　12：20 ～ 13：10　13：30 ～ 15：30 広島 YMCA 本館　広島 YMCA 本館　広島 YMCA 本館 本通り商店街（買い物・自由夕食） →→→→→（徒歩）→ とうろう流し →→→→→ ホテル 16：00 ～ 18：00　18：30 ～ 20：30　20：50 【宿泊：ホテルビスタ広島】
8／7 （水）	ホテル →→→ （路面電車） →→→ 被爆体験者講話 →→→ （路面電車） →→→ ホテル（荷物回収） →→→ 07：00朝食　08：00出発　09：30 ～ 10：45（アステールプラザにて）　11：20～11：30 （路面電車） →→→ 広島駅(買い物・自由昼食) →→→ のぞみ 130 号 →→→ 東京駅 →→→ とき 335 号 →→→ 12：00 ～ 12：30　（12：53発　16：53着）　（17：16発　19：15着） →→→→ 新潟駅 19：45解散

※８月１０日　新潟市主催　平和祈念碑献花式（新潟市中央区雲雀町１８番地　水戸教公園）に参加。献花式への参列のほか、新潟シティガイドより戦争当時の新潟市の状況などについて説明を受けました。

参加者名簿

氏名	フリガナ	学校名	学年
江口　弘幸	エグチ　ヒロユキ	附属新潟中学校	2
乙川　今命	オトガワ　イマナ	潟東中学校	2
加藤　未奈	カトウ　ミオナ	附属新潟中学校	3
小泉　駿介	コイズミ　シュンスケ	新潟第一中学校	2
木浦　咲良	コノウラ　サクラ	鳥屋野中学校	3
小林　麗生	コバヤシ　ウララ	中野小屋中学校	3
小林　航己	コバヤシ　コウキ	附属新潟中学校	2
笹川　拓真	ササガワ　タクマ	味方中学校	3
鈴木　結菜	スズキ　ユイナ	高志中等教育学校	2
須田　結心乃	スダ　ユイノ	曽野木中学校	2
関口　未来莉	セキグチ　ミクリ	曽野木中学校	2
高松　來未	タカマツ　クルミ	曽野木中学校	2
田島　生	タジマ　セイ	新潟柳都中学校	2
冨岡　千春	トミオカ　チハル	葛塚中学校	3
中島　隆之介	ナカジマ　リュウノスケ	附属新潟中学校	2
中野　愛	ナカノ　アイ	高志中等教育学校	2
平山　芽依	ヒラヤマ　メイ	高志中等教育学校	2
広瀬　未侑	ヒロセ　ミウ	寄居中学校	2
本保　奏葉	ホンボ　カナハ	新潟柳都中学校	2
丸山　心春	マルヤマ　コハル	藤見中学校	2
山賀　優	ヤマガ　ユウ	巻西中学校	2
山本　麟太郎	ヤマモト　リンタロウ	附属新潟中学校	3
渡辺　舞子	ワタナベ　マイコ	五十嵐中学校	2
渡部　莉子	ワタナベ　リコ	新津第二中学校	3
何　念	カ　ネン	新潟大学	
余　璐	ヨ　ロ	新潟大学	

※中学生は五十音順

２　参加中学生による感想文

広島で学んだこと

附属新潟中学校　江口　弘幸

私は、小学生の頃に「はだしのげん」という作者の被爆体験を元にした漫画を読んだことがあり、以前から原爆に興味を持っていたので、今回の広島平和記念式典派遣事業に参加しました。特に、広島で見たいと思っていたのは、平和記念資料館にある実際の状況を写した写真です。それなりに覚悟はしていましたが、本当に見た時のショックは大きかったです。

資料館には、原爆によって苦しんでいる人々の様子を写した写真や絵、原爆による熱戦で黒くこげたお弁当の実物などが展示してありました。その中でも心に残っているものは、二枚の写真です。

一枚目は、被爆から七年後に発掘された遺骨という写真です。私は、この写真を最初に見た時は、鳥肌が立ちました。頭がい骨を見るのも初めてなのに、山のように並んでいる様子が怖かったです。しかし、その骨の山が原爆によって亡くなられた方の一部だと思うとぞっとしました。

二枚目は、原爆の投下された年に生まれた新しい命を写した写真です。この写真は最後にあったので、今まで見てきたせつない思いをやわらげてくれる写真でした。被爆しながらも生き延びた両親がうれし泣きをしながら子どもを抱き上げているこの写真を私は、一生忘れることはないと思います。命の大切さが分かる一枚でした。

広島派遣事業に参加して思ったことは、戦争は二度と起こしてはいけないということです。今の平和な世の中が続くために私は、戦争の怖さを知らない人に学んできたことを一つでも伝えていきたいと思います。それと同時に今ある幸せに感謝しながら、生活したいと思います。

原爆におびえぬ世界へ

潟東中学校　乙川　令命

僕は、平和記念公園を見学し、公園自体が原爆の被害の大きさを表す資料となっていることに驚きました。

公園の中には、原爆の子の像や被爆した墓石などがありましたが、ガイドの方によるとこの平和記念公園は当時でいう町だったらしく、被爆後、がれきの山となりました。当時そこに住むしかないという人が多く、家などを建てるため、がれきの山を砂でうめて整地したそうです。そのため、今でも公園の下を掘ればがれきや骨がでてくるということでした。僕はこの話を聞いた後、自分が今、被爆した町の上にいると気づき、こわくなりました。

公園を見学して、今の僕たちの暮らしや町に幸せをあらためて感じさせられました。たった一つの爆弾で、自分たちの町や罪のない人々、豊かな自然までが一瞬にしてうばわれました。七十年間草木が生えないとされていたところも今では豊かな自然、草木があります。これは、人の復興を目指す努力がなかったらなしとげられなかったと僕は思います。

後日、被爆者の方にお話を聞いたところ、その方も、苦しい時こそお互いに助け合うべきだと言っていました。僕もその通りだと思います。今でも各国で争いがあり、罪なき多くの人が困り、苦しんでいます。そのような人たちに自分は関係のないことだと背を向けていては、いつまでも平和には近づかないと思います。前日もニュースでは、外国でテロがあり、数十人の死者が出たと報道がありました。今でも、そのような悲しいニュースが後を絶ちません。これでは、昔も今も争いがあることには変わりないのです。

僕は、この研修に参加し、唯一の被爆国である日本が世界の先頭に立って平和について発信し、平和に導くべきだと思いました。僕は今後、身近な人に話すことから始めて、周りの人に原爆の恐ろしさや普段の暮らしの幸せさを伝えていきます。これからの未来が核兵器におびえて暮らすことのない世界になっていくことを願っています。

広島平和記念式典派遣事業へ行って

附属新潟中学校　加藤　未奈

私が今回の広島平和記念式典派遣事業に参加して特に印象に深く残ったことは二つあります。

一つ目はとうろう流しです。とうろう流しの始まりは追善と供養のため、と言われており今では慰霊と平和へのメッセージの意味を持つようになりました。そんなとうろう流しを実際に体験し、見て私は平和を願う人はこの世界にたくさんいるんだ、と感じました。広島の元安川には火の灯ったたくさんのとうろうが流れていました。そのとうろうは慰霊と平和への願いを人から託されて流れています。つまりとうろうの光の数は願いの数と同じということです。そこから私はみんな平和を望んでいるんだ、ということを感じました。

二つ目は被爆された方のお話です。お話を聴いている中で「許せないと思いました。」そう原爆が落とされたことに憤りをあらわにしている方もいました。今まで私は原爆のことについて何も知らなかったけど、今回の事業を通して学び、私も同じ気持ちになりました。

今回の研修で感じた平和の尊さを私は今後周りに広めていきたいと思います。私たちと同じくらいの年代の子供は平和についておおまかには知っていてもよくは知らないと思います。なので今回学んだことを発信して平和な世界をつくっていきたいです。今後世界が平和となり、人類が笑顔で過ごせることを願っています。

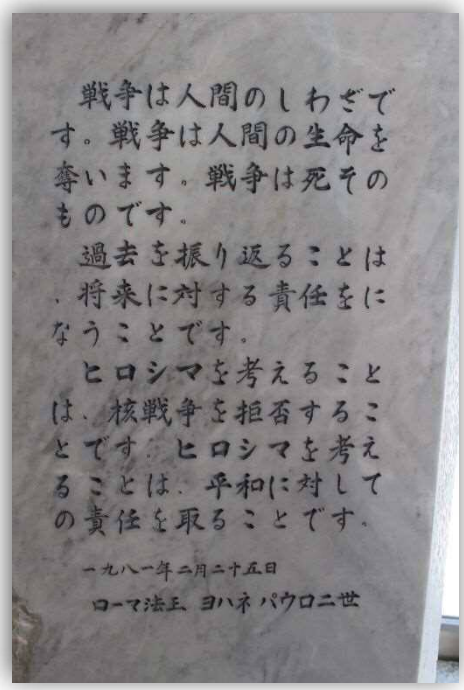
パウロ二世からの平和のメッセージ

新潟第一中学校　小泉　駿介

僕は、原爆資料館を見学し、その中にある石碑が印象に残りました。理由は、そこには三十八年前に来日したローマ法王、ヨハネ・パウロ二世が平和記念公園で話したことが書かれていたからです。僕は、この演説の中で、「戦争は人間のしわざです。」という言葉に感激しました。なぜなら、この言葉だけで、戦争は本当に人間のやった過ちなんだと改めて感じたからです。そして、これ以上核兵器を使ってはならないと思いました。他にも、「戦争は死そのものです。」や、「ヒロシマを考えることは、核戦争を否定することです。」といった平和を願う言葉が石碑に刻まれていました。僕はそれらを読んで、平和であり続けたいという気持ちがより一層深まり、誇りに思いました。

今年の十一月、フランシスコ法王がヨハネ・パウロ二世法王以来三十八年振りに来日し、広島・長崎を訪れます。被爆地で何を語り、何を世界に発信するのかを注目し、恒久の平和へ導いてくれることを期待しています。そして、ヨハネ・パウロ二世法王とともに何を残すか楽しみです。

僕は、この石碑を読んで日本政府や世界に訴えたいことがあります。まず、日本政府には、核兵器廃止条約に賛成し、唯一の被爆国として世界をリードしてほしいと思いました。そして、世界には核兵器を廃絶し、核なき世界へと方向転換するべきだと思いました。世界中の多くの人々がヒロシマ・ナガザキについて考え、恒久の平和がいつまでも続くよう努力するように訴えながら、平和のために被爆者から聞いた証言を後世や世界に自分が発信源となるように発信し、核なき世界へ前進できるよう努めていきたいです。



私たちの使命

鳥屋野中学校　木浦　咲良

「今の平和はたくさんの命の上に築かれていることを忘れないで。」これは、被爆者の朴南珠さんの証言だ。私はこの言葉がとても印象に残っている。

三日間を通し、学校では習うことのできない「ヒロシマ」をたくさん見てきた。この事業に行く前は原爆とは無縁だと思っていたし、どういうものなのかさえわかっていなかった。知りたいとも思わなかった。しかし、私は悲惨な事実をつきつけられ胸が苦しくなった。水を求め彷徨う血だらけの人々、一瞬でなにもかも奪っていった恐怖、死体を焼きつづける日々。

本川小学校という爆心地から４１０ｍの学校だ。この学校も大きな影響を受け、全校生徒４００人のうち先生一人と生徒一人のみが奇跡的に生き残ったという。生き残れたことは喜ばしいことかもしれない。しかし、同時にクラスメイトを失っている事実は決して塗り変えることができない。同級生だけでなく、両親それに兄弟までなくした人もいる。生き残っても放射線の影響が大きく、亡くなる人も多い。

被爆者の本保さんは当時１４歳だった。「爆発した時の爆風で工場の入り口から奥の壁まで飛ばされた。周囲を見渡すと、全てぺしゃんこで火の手が見えた。逃げている途中、全身血まみれの人ばかり見た。橋を渡ろうとするが、地面が見えないほど人が横たわっている。一歩ふみ出すと手足をつかまれ、『水をくれー、水をくれー』と言われたが、けとばしながら橋を渡りきった。今でも申し訳ないことをしたと後悔している。」
と語ってくれた。

私は、この研修で学んだこと、感じたことを周りの人だけでなく、世界中の人に発信していきたい。被爆者も高齢化している中、原爆を実際に体験した方から話を聞くことができて本当によかったと思う。これからは、私たち中学生が次の世代に語りついでいかなければならない使命がある。

もう一度考え直してみて

中野小屋中学校　小林　麗生

私は初めて広島へ行き、平和について多くのことを学ぶことができました。特に２つ心に残りました。

１つ目は、平和資料館でのことでした。資料館には当時の子ども達の服やお弁当箱などあり、日常生活が原爆によって突然うばわれたんだと胸が苦しくなりました。被爆者の方の写真も飾ってありました。教科書や授業で見たものより悲惨で、原爆の恐ろしさをものがたっていました。「こんな思いをほかの誰にもさせてはならない。」この言葉は、被爆者の方が辛く悲しい境遇の中で思い悩み、「憎しみ」や「拒絶」を乗り越えて紡ぎ出した悲痛なメッセージです。慰霊碑はこうした被爆者の方の訴えへの答えとして、「安らかに眠って下さい　過ちは繰返しませぬから」と刻まれてあり、全人類の共存と繁栄を願い、真の世界平和の実現を祈念するヒロシマの心を表しているんだと分かりました。

２つ目は、平和祈念式典です。初めて参列したのですが、ものすごい人の数にとても驚きました。全国各地、世界中からも参列していて、壮大な式典だと感じました。これだけ多くの人が集まって平和になることを願っているのに、まだ核兵器が残っていたりしています。平和公園内に、「平和の灯」というものがあります。これは毎日火がついていて、何かが達成されたら火を消すそうです。それは、「核兵器が世界から無くなったら火を消そう」。核兵器が無くならない限りこの火は燃えつづけます。１日でも早く火が消え、皆がよろこぶ姿が見たいと願います。

私が広島へ行ってみて、資料、写真で見るより迫力、原爆のおそろしさを思い知らされました。直接被爆者の方から話を聴く場面があり、当時の悲惨さ、苦しみと共に情景が頭の中に出てきました。私たちに原爆について知ってもらうためにこのような場面が残っています。今の私たちに出来ることはないでしょうか。誰もが争いもない平和な世界を望んでいると思います。しかし、今も世界あちこちで争いが起こっています。自分の国だけ良くなれば良い。そんな自分勝手な思いでだけで行動する人たちが多くなっているように思えます。１人１人が人を思いやり、国同士が仲良く、平和になる日が来ればいいのにと願うばかりです。そして被爆者の方々の経験を無駄にしないように。また戦争で亡くなった、たくさんの尊い命があったから今に至るという事を私たちは今一度、考え直さなければいけないと強く思いました。

「平和」と「当事者意識」

附属新潟中学校　小林　航己

第一次世界大戦…９５％対５％、第二次世界大戦…５２％対４８％、朝鮮戦争…１５％対８５％、ベトナム戦争…５％対９５％。このデータは、各戦争の戦死者のうち、軍人と民間人の割合を表している。つまり、核を含む近代兵器が利用される近代戦争は民間人の大量虐殺が増加していたのである。この話を含め、原爆被害者証言のつどいでは寺本貴司さんの証言を聞いた。爆心地から１ｋｍ離れた場所で被爆した寺本さんは当時１０歳であった。２０００年頃から証言活動を始められたが、「戦争が起きたらどうなるか知ってもらいたい。だから、恥を含めどんなことでも話すようにしている。」と疎開先の農家から作物を盗んだことも話されていた。自分が誕生する以前の事象、ましてや自らが経験したことのない事象に対しては、無知であることが多々あると考える。様々な事実をありのままに把握することは無知の知の効果があり、これらの諸問題に真摯に向き合う原動力となるということを学んだ。また、被爆直後に近所の方に助けてもらい、２カ月後にその方が亡くなったときに「与えられた命」を感じたことも話された。

被爆体験者講話では朴南珠さんが講話をされた。朴さんは被爆後、体に湧いたウジ虫を仲間で除き合ったことを振り返り、「平和はたくさんの命の上に成り立っていることを忘れないでほしい。」と人をいたわる気持ちが大切だと話された。寺本さんも「与えられた命」とおっしゃったように、被爆者の方々は助け合い、共に歩むことを大切にしていると感じた。平和とは無関係かもしれないが、個人主義が強固すぎる現代では、他者との協働が必要だと導くことができる。或いは、協働によって世界が平和へ行き着く可能性もある。

最後に、皆様に問いたい。平和とは武力をどのようにして達成できるのか？核の廃絶によるのか、或いは、武力均衡によるのか。私は決して一方を推奨するつもりは毛頭ない。今、自分や我々に出来ることは、様々な概念を理解し、感情的ではなく、客観的に平和への手段を考えることだと思う。その為には厳格な当事者意識を何らかの機会で保持する必要がある。今後、世界中で平和への議論が活発になり、一定の総意が排出されることを願っている。

広島と原爆

味方中学校　笹川　拓真

一日目まず平和記念公園を見学しました。そこには、原爆の歴史を感じさせる物が多くありました。有名なのが原爆ドームです。慰霊碑と屋根の間から原爆ドームが見えるようにしたり、平和の灯火では、燃えている火を両手で合わせるイメージで造られた石で囲まれていたりなど色々な工夫をしていることが分かりました。このような工夫や、ガイドの方の話を聞いていると、過去の出来事を次の世代へと忘れないように受け継いでいきたいという想いがすごく伝わってきました。

また平和記念資料館にも行きました。そこには当時の状況や、原爆によっての被害のひどさがわかる物などたくさん展示してありました。写真を見ただけでも原爆のひどさ、つらさが伝わってきました。

二日目まずは平和記念式典に参加しました。当日は雨でしたが、とても多くの人が参加していたのでびっくりしました。市長や安倍総理大臣、小学生が平和を誓う言葉を述べていました。とても良い言葉で胸に刺さりました。

次に原爆被害者証言のつどいに参加しました。僕の班は河本謙治さんからお話をしてもらいました。実際に被害にあった傷を見て、すごくひどさが伝わってきました。今このように実際に被害にあった方から話を聞くことはとても良いことだと思うので、もっとたくさんの人に話を受け継いでいってほしいと思いました。

また夜にはとうろう流しをしました。たくさんの人が参加していたのでその人たちの人数分想いが放たれたのだと思いました。川に流されたとうろうの景色はとても幻想的できれいでした。僕の書いた想いも届いてほしいです。

三日目は全員で被爆体験者の方の講話を聞きました。実際に被害にあった方の話を聞くのは二回目でしたが、それでも被害のひどさがとても伝わってきました。話には感情がこもっており、胸に響きました。伝えたいこととして、原爆は絶対に兵器として使ってはいけない、人の優しさを大切にし、助け合うなどがありました。このようなことを胸に留めて生活していきたいと思いました。

この研修で感じたことを、僕は今後また次の世代へと伝えていきたいと思います。そのためにまずは周りの人からでいいので伝えていくことが大切だと思います。今後、世界が一人一人が助け合い、過去の過ちをくり返さず、平和になっていくことを願っています。

現実

高志中等教育学校　鈴木　結菜

私は広島の派遣研修で印象に残っていることが二つあります。

一つ目は、原爆というものが人々にもたらす恐怖です。広島平和記念資料館では、当時の状況を示す写真や絵、被爆者の遺品などが展示されていました。特に、多くの展示品の中でも、炎で破れたたくさんの服が原爆の恐ろしさを物語っていました。これらを見て私は、遺族の悲痛な思いを肌で感じました。また，被害にあった人々が病気や辛い思いをし、死にたくても死ぬことができないという複雑な思いをしていたと分かり、胸が痛くなりました。辛く悲しい現実を目の当たりにして思うことはたくさんありましたが、しっかりと目に焼き付けることができました。

二つ目は、命の大切さです。私たちは、被爆体験者の朴南珠さんから原爆についての話を詳しくお聞きしました。広島に原爆が投下され、約１４万人もの命が奪われたと初めて知りました。一瞬で青空から灰色の煙に染まった広島の空。「何が起きたのか」とパニック状態になったとおっしゃっていました。あの時、「水をくれ」と倒れながら助けを求める人々に水をあげれば良かった、という罪悪感が残っていると語ってくださいました。今でも子供のころの記憶が鮮明に残っているということは、本当に衝撃的なことだったんだなと思いました。そして、原爆投下後に家族全員が揃うことはほとんどないとお聞きして、今自分たちが当たり前に生きていることが当たり前ではないと感じました。

私は、研修を通して、多くのことを学びました。この学びを生かして、友達や家族に自分が感じたことを伝えていきたいです。そのためには、自分たちが原爆についてもっと理解を深める必要があると思いました。今後、核兵器のない、戦争のない平和な世界になっていくことを願います。

見て・聞いて・触れて…

曽野木中学校　須田　結心乃

私は原爆被害者証言のつどいに参加して、実際に原爆の被害を受けた方から、原爆のおそろしさ、当時の様子について話を聞きました。

話の最初に写真を見せていただきました。当時の写真を見たときに、腕の傷跡が当時の悲惨さを物語っていました。その傷を負った証言者の方は、太陽や光にあたると針をつきさすように痛いとおっしゃっていました。当時、傷を治すために医者に行っても少しの手当てしかしてもらえなかったそうです。実際の傷跡は当時よりもきれいになっていましたが、七十四年がたった今も原爆で負った傷が治っていません。それを聞いた私は胸が痛みました。最後に原爆を証言者の方と握手をした時に悲しさとおどろきなど、なんともいえない感情になりました。その方は、「原爆という苦しいことがなく、きれいで美しい国にするために、若い世代が頑張ってほしい。」とおっしゃっていました。

また、３日目にも被爆体験者の方からも話を聞くことができました。その方は、「今の日本は平和。この平和は原爆があってこその平和ということを忘れないでほしい」「人へのおもいやり、優しさが大切」とおっしゃっていた言葉がとても心に残っています。その言葉を聞いて世界中の一人一人がおもいやりと優しさを意識していけば、平和につながるんではないかと思いました。

またお二人は、「若い世代に頑張ってほしい、若い世代に語り継いでいってほしい。」と多く口にする言葉を、私は実行していきたいと思いました。原爆体験を伝えることができる方はだんだんと減少し、平均年齢が八十二歳と高齢化してきています。そんな中で、私たちのような若い世代が八月六日にどんなことがあったのか、当時の苦しみ、原爆体験者が伝えたいことなどを多くの人たちに伝えていくことがとても大事なことだと強く感じました。そして、原爆が二度と使われない平和な世界になることを私は望みます。

広島へ行って考えたこと

曽野木中学校　関口　未来莉

私が広島に行って考えさせられたことは、平和への思いを先の人々や国際社会にどう伝えるか、知って、考えてもらうかということと、なにより、自分がどうするかです。

私は、広島へ行く前はまったくと言っていい程、原爆も、戦争のことも考えたりすることはありませんでした。過去の戦争という事実だけを耳にして知っているように思い込んで、この年まで過ごしてきました。ですが、今回、機会をいただいて広島へ行くことがかない、少しは考えることができたと思います。

広島で多くの方の話を聞かせていただくことができ、資料館やとうろう流し、原爆ドームも見ることができました。なかでも、最終日に聞かせていただいたある方の話の中の言葉が、最も印象に残りました。

「今の平和はたくさんの悲しみの上に成り立っているということを忘れないでほしい」という言葉です。その言葉を聞いて私が思ったことは、私達は忘れないだけ、知っているだけで本当にいいのだろうかということを思いました。私達は平和なこの世界をただ生きていくだけで、しっかり貢献できているのか、他にできることは、もっと身近にもあるのではと考えたときに、被爆した方たちが何度も、誰もが訴えたことを思い出しました。

「しっかり、この事実を伝えてほしい。」という訴えです。

では、この訴えに私や私たちはどう答えていくのか、どうしたらこの訴えをしっかり伝えられるのか、と考えたときにまず思ったのが、事実をしっかり知ることだと私は考えました。なぜこの訴えが生まれてしまったのかを考えたときに、事実を伝える人々が少なくなっているからだと考えたからです。しっかり真実を伝えられることが、この平和な日本で今、生きている私たちの使命だと感じています。

最後に、SNSなどで多くの情報がありますが、現地に行くことで感じる事実などにも、大きな意味があると思います。私自身、式典に出席してみて、海外の方たちが多いとわかりました。原爆や核の恐ろしさなどが、国際社会にも広まってほしいと思いました。唯一の被爆国の一員として、私自身も何か一つでも真実を伝えていきたいです。

ノーモア・ヒロシマ

曽野木中学校　高松　來未

私は、８月５日から７日まで、広島派遣事業に参加し、原爆の恐ろしさと平和について学んできました。特に印象に残っていることが２つあります。

１つ目は、「平和記念公園」です。そこには、平和を象徴するもの、霊に祈りを捧げるものが多くありました。「平和の池」は、ガイドさんによると、水がほしくてたまらないのにもらえなくて、苦しみながら亡くなっていった被爆者の霊に、たくさん水を飲んでくださいという気持ちを込めて造られたそうです。平和記念資料館にも、「あの時、一滴でもいいから水を飲ませてあげれば良かったと後悔している…」という言葉が残っています。「平和の灯」は、核兵器廃絶と世界恒久平和を希求するために建立されました。この火は、昭和３９年８月１日に点火されて以来ずっと燃え続けていて、核兵器が世界から姿を消す日まで燃え続けるそうです。私は、１日でも早くこの火が消えることを願っています。

２つ目は、被爆体験者の方の講話です。私は、２人の方の講話を聞きました。当時の状況や心情を想像しながら聞いていると、とても胸が締め付けられるような気持になりました。また、２人の方が共通して話していたことがあります。それは、原子爆弾が投下されてすぐ後の状況を、苦しみの極限を表す「地獄」という言葉で表現していたということです。だから、たった１発の爆弾で広島の町を地獄にかえてしまった原子爆弾は、とても恐ろしいものだと、改めて認識しました。

今回の研修で、戦争という過ちを繰り返してはいけない、核兵器と平和は共存することはない、ということを強く思いました。それでも世界各国に核兵器は存在し、未だ核兵器廃絶の道筋は見えていないという現実があります。今、私が平和のためにできることは、広島で学んだことを、周りに発信していくことだと思います。なぜなら、核兵器の恐ろしさを伝えることで、核兵器のない平和な世の中を築くことに繋がると思うからです。今後、争いがなく、国と国、人と人が尊重し合える平和な世界になることを祈っています。そして、今回学んだこと、感じたことを私は決して忘れません。

次の世代へ

新潟柳都中学校　田島　生

私は八月五日に広島で平和記念公園を見学しました。そこでは、ガイドの方が猛暑の中走り回って真剣に話をしてくださいました。自分たちに何かを強く訴えかけているように感じました。何か、というのは新潟から広島まで代表として派遣された理由でした。広島の子供だけが語り継ぐのではなくて、未来に生きる人々が原爆を語り継ぐためであると分かりました。そのために、自分から発信していくことが大切だと思いました。ガイドの方は最後に、核によって一番被害を受けたのは子供たちであり、一番原爆の悲惨さを伝えようとして平和を訴えたのも、子供たちであったという内容を話していました。今の自分にできることを強く考えさせられました。

また、八月六日と七日に被爆者の証言や講話を聞きに行きました。私は原爆が投下された日の残酷な話を聞いていると、辛い体験を大きな声で大勢の前で話していてすごいと思いました。普通なら勇気がいるし、難しいことだと思いました。しかし、被爆者の方にとっては何も行動に移さないと、苦しい、打ち明けたいという思いがあると思いました。その証言や講話で学んだことは、原爆はとり返しのつかないものであるということや、原爆を持たないことが人類の義務であるということでした。また、たくさんの命と悲しみの上にある平和だということや、お互い思いやる優しさを持ち、助け合いながら生きてほしいという言葉が印象に残りました。

この研修を通して私は今後、まず家族や友人に原爆に関する伝えていきたいと思います。例えば、核をめぐってのニュースが出ていたり話題になった時などに少しずつ話していきたいです。今後、世界が恒久平和で核戦争のないものとなっていくことを願っています。そして、被爆者も語っていた苦しいことのないような美しくきれいな世界にもなってほしいと願っています。

ヒロシマを語り継ぐ

葛塚中学校　冨岡　千春

「苦しいことのないきれいな美しい世界を築いてほしい。」こう語ったのは、十八歳のときに被爆した河本さん。私は、この研修を通して、河本さんから聞いた体験を語り継いでいかなくてはいけないと強く思いました。

私がこの研修に参加して一番印象に残ったことは、原爆被害者証言のつどいです。河本さんからお話を聞くことができました。

原爆投下の後、一瞬で火の海となった広島。「熱い、熱い」「助けてくれ」と叫びながら倒れていく人々。たった一つの核兵器で、たくさんの命がうばわれ、生き残った人たちは目に見えないところまで深く傷つけられました。河本さんは、被爆後の長い間、火傷により普通の生活を送ることができなかったそうです。仕事ができるようになり会社に復帰しても、誰も歓迎してくれず、「生き返ったのか」「人間ではない」などと言われ、とても辛かったとおっしゃっていました。

また、今でも後遺症に苦しむ河本さんは、国からの援助を受けています。その援助は国からの認定書がないと受け取ることができず、河本さんへの許可が下りたのは十年前で、あの日から六十年以上経過していたそうです。そして、海外にいる被爆者は、日本に来ないと認定書をもらえない、限られた人しか認定書をもらえないなど、これから世界中で解決しなくてはいけない問題がまだ残されていることが分かりました。これらの問題を解決し、戦争を語り継いでいく。被爆者の高齢化が進む中、それが私たち若者の役目だということを、河本さんのお話を聞いて強く思いました。

今現在、世界では九つの国が核保有国とされています。第三次世界大戦が起こると、これらの国が競って核兵器を使い、人類は絶滅してしまうといわれています。そうなると、七十四年前のヒロシマの悲劇を繰り返すことになります。私は、あの犠牲になった方々のためにも、絶対にこのようなことはあってはいけないと考えます。そして、一日も早く非核化が実現され、平和記念公園にある「平和の灯」が消される日が来ることを願っています。

平和のために

附属新潟中学校　中島　隆之介

私は、八月五日から七日まで平和について考えるために広島に行きました。そこでは、原爆や平和について様々なことを学びました。その中から二つのことを取り上げて書いていきたいと思います。

一つ目は、原爆の恐ろしさです，私は、被爆された方たちと対話をしてきました。原爆が落とされた日、八月六日は、朝から快晴だったそうです。そこに一つの原子爆弾が落とされ、爆音とともに光と炎に町全体がつつまれました。意識を取り戻した時には、辺りは真っ暗で、辺りが見えてきても何もかも無くなってしまっていたそうです。そして、遠くで火の手が上がって、皮膚がただれて「あついあつい」と言いながら水を求めて歩いている人がいたそうです。又、原爆が落ちてから十日程たつと、放射能を浴びたことによる、急性白血病を発症する人が大量に出てきたそうです。現在でも、放射能を浴びたことによる後遺症に苦しむ人がたくさんいるということも知ることができました。

二つ目は、平和を訴え続けることの大切さです。私は、広島平和資料館を見学しました。そこで、驚くべきことが分かりました。なんと、広島を一発で血の海にしたような核兵器をアメリカやロシアを筆頭に世界の国々で所持していることが分かりました。広島の人々や被爆した人たちなどは特に、核兵器を無くして、世界が平和になることを訴え続けています。私は、このような取り組みが、世界を平和にしていくことに繋がっていくのだと感じました。

この研修で感じたことを、私は、家族や友人に伝えていくことはもちろん、感じたことを伝える以外の方法で活かしていきたいと思います。例えば、現在も放射能による後遺症により苦しんでいる人たちを助けるなどの活動を実際に行うことです。このような活動を日本中、いや世界中に広めていくべきではないでしょうか。核兵器や戦争のない平和な世界の実現のために。

「平和」とは

高志中等教育学校　中野　愛

「平和」とは何か。これは一人一人が考え続けなければいけないことだと思います。私はこの研修で、「平和」についてたくさん考えてきました。

私が一番影響を受けたのは、被爆体験者の講話です。原爆投下後、見たこともない人間の姿を目の前にし、「水」という一言だけを発していたそうです。しかし、水を飲んだら死ぬと言われていたため、水を与えられなかったことを今でも後悔しているそうです。広島の地面には現在も、がれきと骨が埋まっていると聞きました。このことを知り、今の日本の自由と平和は、たくさんの死者と悲しみからできているということを、私たちは決して忘れてはいけないと思いました。

また、被爆者の方はこうおっしゃっていました。「原爆は絶対に兵器として使ってはいけない。」と。広島に投下された一つの原爆が多くの人々の心に穴をあけてしまったことでしょう。この穴は決してうまることなく、現在も後遺症に苦しみ、不安を抱き続けている人がいます。

そして今、被爆者の方からお話を聞ける機会が少なくなってきています。どのようにして次世代につなげていくのか、同じ過ちをくり返さないためにできることは何か、これらが課題になってくるのではないでしょうか。「原爆の子」の像は全ての子供たちが作り上げたものです。同じ世代の人々ができるのであれば、今の私たちには何か「平和」のためにできることがあるのではないでしょうか。それは「人間らしく生きること」ではないかと思います。広島で学んだことをたくさんの人に発信して、恒久平和な世界を私たちでつくりあげていきます。未来の世界から核兵器がなくなり、「平和の灯火」が消える日が来ることを願っています。

たったひとつの原子爆弾で

高志中等教育学校　平山　芽依

初めて広島を訪れて、最初に感じたことは、ここが本当に原爆の落とされた町なのか、ということです。全く実感がありませんでした。

しかし平和公園の見学で、この下を掘り下げるとまだ人骨がうまっていると知りました。このことは、原爆について何も解決されていない、ということを伝えていると思いました。

当時、空襲での火災が広がらないように、住宅街の家をこわして空き地をつくっていましたが、やっていたのは全て広島の学徒隊でした。そのため六千三百人が亡くなりました。

八月六日、その日の朝も集まらなくてはなりませんでしたが、たまたま学校を休んでいて爆心地から離れたところで被爆された方に私は話を聞くことができました。

その方が被爆されたのは、妹と弟を疎開先まで送っているときでした。「電鉄の中で『B29がとんでら』という大人の声が聞こえたその瞬間に、かすかな爆音と共になにかがピカっと光りました。その約三十分後に黒い雨が降ってきて、そのときに初めて空襲だったと知りました。みんな水を求めてきたけれど、火傷の人に水を飲ませてはいけないと聞いて無視をしていました。今になって思い出すとつらくなります。これらは言葉では言い表すことのできないほどの悲惨さでしたが、亡くなった人の分まで強く生きようと必死でした。」と話してくださいました。

このお話を聞いて、私は胸がしめつけられました。

今回の研修で学んでことや感じたことを、今後学校の人や家族、出会った人に伝えていきたいです。今の日本が平和なのは悲しみのうえに築かれた平和だということを忘れず毎日に感謝して生活したいです。今後、日本を中心としてだれもが認める平和を地球全体で実現させ、核兵器のない時代となっていくことを願っています。

平和への想い

寄居中学校　広瀬　未侑

私は被爆者の方々の証言が一番印象的でした。実際に聞いたお話は、本で得た情報より迫力がありました。一つ一つの言葉に重みがあり、少しずつお話に取り込まれていきました。被爆者の方は後遺症というものと今も戦っています。痛みはまだあり、薬を服用しているようです。そのような中でも、当時のことを鮮明に語ってくださいました。傷ついたものをもとに戻すことはできませんが、今の私達にするべきことはあると思います。

それは、「人類の歴史に刻まれた事実を後世へ伝えること」「決して原爆の記憶を消してはいけないこと」だと思いました。これらは、被爆者の方々が一番望まれていることであり、世界にも発信していかないといけないものだと感じたからです。しかし、いざ取り組むとなれば膨大な時間、人、力が必要となりますが、今まで懸命に築きあげてくれた方々の汗と涙の執念の結晶を無駄にはできません。世界でも数少ない負の遺産を展示した資料館で、原爆のむごさを突きつけられ、戦争の愚かさと、悲しさを思い、世界の核所持の事の重大さが肌から感じることができました。平和への強い思いを支えに精力的に活動していきたいと思いました。「今を生きる私たちががんばらずどうしろというのか」悲劇を受け止め、豊かで平和な世の中を理想のままで終わらないようにしたいです。

この事業を通し、改めて人を思いやる気持ちが大事で、助け合うとお互い心が豊かになれることを知りました。これらは日常でしていることですが、当たり前だからこそ意識し、気を付けたいです。日々の積み重ねで成り立つものなので着実に行動し、人の気持ちによりそえるようにしていきたいです。何もしないよりかは積極的に進めていく気持ちが大事だと学びました。これらが笑顔の輪として広がっていけば一つの平和になると思います。

原爆の恐ろしさ、平和の大切さ

新潟柳都中学校　本保　奏葉

私は、「新潟市広島平和記念式典派遣事業」に参加し、「平和公園」や「広島平和資料館」を見てきました。その他にも原爆被害者の朴さんと本保さんのお話を聞いたり、「平和祈念式典」に参列しました。そこで私は原爆の恐ろしさや悲惨さを学びました。なかでも被爆者の朴南珠さんのお話がとても印象に残りました。

朴さんのお話は、被爆してつらかったこと、思ったこと、原爆の恐ろしさなど、被爆した当時のこと、今の思いなどを語ってくださいました。朴さんのお話によると、原爆が投下された八月六日はこの夏一番くらいの暑さで晴れていたそうです。その日もいつものようにＢ２９が空をとんでいたそうですが、朴さんは、「怖くなかった。」と語っています。当時広島にもＢ２９はとんできていたそうですが、なぜかいつも広島には空襲がなく、「今日も冷やかしみたいにとんできたんだ。」と思っていたからだそうです。

その漠然とした安堵感が一瞬にして消え去ったのは、朝八時十五分のことでした。原爆の一撃により、広島は火の海となったのです。朴さんは全身の血の気が引き、恐怖を通り越して何も考えられなくなったそうです。町は全身血だらけの人であふれ、たくさんの人が亡くなりました。生き残った人々も、残留放射線によって急性白血病やガンになるなど、長い間苦しめられているそうです。

このようなお話を聞き、原爆がどれだけ恐ろしいもので、兵器として絶対に使ってはいけないと感じました。私が平和のためにできることは、この貴重なお話や体験、見てきたことなどを周りの人と共有し、風化しないようにすることです。このことができるよう、学んだことを最大限に生かし、すごしていきたいです。

平和と未来

藤見中学校　丸山　心春

私は広島に行き、２人の被爆者の方からお話をお聴きすることが出来ました。被爆者の方は高齢化が進んでおり、お話を聴くことが難しくなっている現状だと改めて知りました。お話には「命は大切に！」「核兵器は許さない」「被爆での悲しみは二度と起こさないで平和でいて欲しい。」など強い思いが込められた言葉が沢山ありました。その言葉を聴いた時は私たちが作る未来が関係していると思いました。その一方で、被爆者、被爆二世（被爆者の子ども）への差別があったり、被爆に対しての理解が貧しいこと、核兵器を使っていること、そして、一番の問題は、実際に被爆された方の減少や高齢化、記憶の風化だと私は思いました。お話の最後には、「広島を襲った被爆の悲しみを忘れずに、この悲劇を踏まえて、平和で豊かな未来にしてほしい。」と言っていました。

とうろう流しには、とても沢山の外国人が訪れていました。世界の人も、原爆被害のことについて本当に考えていて、平和を願っていることが分かりました。私はとうろうに、「ずっと平和な人生がおくれますように」「ずっと笑顔でいられますように」と思ったので書きました。４０分程並んで疲れたけど、とうろうの明るさと数にとても感動しました。

私がこの研修で学んだことは３つあります。

１つ目は、当時の様子、被爆後についてです。資料館のイメージ映像では、町が一気に真っ暗になりました。お話を聴いた２人ともそう言っていました。私はその部分が印象的で、原子爆弾の威力が分かるところで怖かったです。

２つ目は、平和な未来を作ることです。現在は、核兵器や差別などが絶えません。その中で、今、私たちに出来ることは、「お互いの事について分かり合い、お互いを尊重すること」です。これは個人でも出来るし、国でも出来ると思います。なので、私も実践していき、少しでも平和へと繋がるような未来にしていきたいです。

３つ目は、人と交流する楽しさです。初めは、不安だったけど、話しかけてきてくれて、友達が出来ました。これからもこの出会いを大切にしていきたいです。

そして、今回学んでことを伝えて、少しでも平和な未来に繋げていきたいです。

広島から学んだ平和

巻西中学校　山賀　優

広島研修では広島でしか感じられないことや、たくさん学ぶことがあり、平和について考えるいい機会になりました。

私が一番心に残ったことは被爆者の方のお話です。寺本貴司さんは十歳の時に被爆したそうです。「机に向かってはがきを書いていたら背後から光がきて、急に暗くなり、変なにおいがして、頭にいろいろ落ちてきたのが分かった。こわくて小さく丸くうずくまることしかできなかった。」と語っていました。寺本さんは最後に平和について、「平和とは仲良くすること。戦争のころに比べると日本は平和になっているが、いじめや差別があることは平和とは言えない。」と語っていました。私は仲良くすることは助け合い、お互いを認め合うことだと思います。認め合うことができていないから、いじめや差別が起きていると思いました。

平和公園や広島平和資料館に行き、被爆した建物や道具を見学しました。広島平和都市記念碑（原爆死没者慰霊碑）には、「安らかに眠って下さい　過ちは繰り返しませぬから」と書いてあります。ガイドさんによると、この過ちは誰のせいでもなく、戦争ということが過ちなのだそうです。私はその話を聞き、戦争を二度と起こしてはいけないと強く思いました。

建物や資料を見たり、被爆者の方の話を聞き、自分が平和のためにできることは、相手を認め合うことだと思いました。人によって、考え方、感じ方は違うと思います。その違いを認め合うことで、その人のことを知ることができ、何をしたら喜び、悲しむか分かるのだと思います。日々の学校生活でも友達の意見をよく聞き、自分の意見を積極的に発表したりすることで、お互いを理解し合えるようになりたいと思いました。

「平和の灯」

附属新潟中学校　山本　麟太郎

僕は、これまで歴史の授業等で広島に原爆が投下され、多くの人々の命や暮らしが奪われたことは学んだことがありましたが、今回の事業で初めて広島を訪れ、原爆ドームや原爆資料館に展示された沢山の遺品を目にし、教科書の知識だけでは決して知り得なかった被爆者の方々の生の証言を聞く機会をいただく中で、原爆投下時の惨状を想像し、言葉にできない程の恐怖を覚えました。あの日から七十四年が経った今もなお、原爆による放射能の後遺症に苦しんでいる人がいるという事実や、かけがえのない家族や友人を一瞬で失った被爆者の方々の心の内を目の当たりにし、原爆が計り知れない程深い傷痕を残したことを学びました。そして、もう二度とこのような過ちを繰り返してはいけないという決意を固めました。

ある被爆者の方はこうおっしゃいました。「今の平和は、悲しみの上に生まれたものだ。」と。自分達が今、当たり前のことを当たり前にでき、平和の中で一日を迎え、一日を終えることができるのは、過去の過ちを二度と繰り返してはいけないという思いから、辛い被爆の体験を後世に語り続けてきてくださった方々のたゆまぬ努力によってもたらされているものに他なりません。

戦後七十四年を迎え、被爆者の方々の平均年齢も八十歳を超えています。いつかは必ず被爆者の方がいなくなる時代が訪れます。だからこそ、僕達のような若い世代が、明日、十年後、そして百年後の平和を守り続ける使命を担わなければなりません。そのために、今回聞いた貴重な証言や体験を身近な人々に伝え、「相手を思いやる気持ち」を大切にして行動していきたいと思います。

広島にある「平和の灯」は台風が来ても、大雨が来ても決して消えることはないそうです。僕も、平和への願いを何が起きても曲げることなく、今後も心の中で、強く、激しく灯し続けていきたいです。

広島を訪れて

五十嵐中学校　渡辺　舞子

私は今回広島を訪れて感じたことがあります。それは、戦争が他人事ではないということです。それまで私にとって戦争とは、過去にあった出来事であり知識として知っているだけでした。ですが今回、いろいろな人のお話を聞き、ゆかりの場所を訪れて本当の意味で戦争を理解できたのではないかと思います。

私の中で特に印象に残っているのが、資料館で見た中学生たちの遺品です。まず私が驚いたのが、服がとても小さいということです。今私たちが着ている服よりも一回り、二回りも小さい服でした。戦時中食料が不足し、今よりも平均身長が十数センチほども低かったと聞いたことがあります。ですが実際に目の当たりにすると、その差に大きな衝撃を受けました。また、服がぼろぼろに破れていたり、ほとんど焼けこげて布の白い部分が残っていないなど、ほとんど原形をとどめていないものも多く、これを着ていた人はどうなってしまったのかと思うのと同時に、私たちがあたりまえのように着ている服や、あたりまえのように食べている食べ物が実はあたりまえではないことを知りました。

私は今回のこの研修を経て、戦争の悲惨さをより深く知ることができました。このような出来事があったと聞くだけでも恐ろしく、実際にその場にいた被爆者の人たちの恐怖を考えるとなにも言えなくなっていしまいます。このように恐ろしい戦争を二度とくり返してはならないと強く思いました。

恐ろしさ

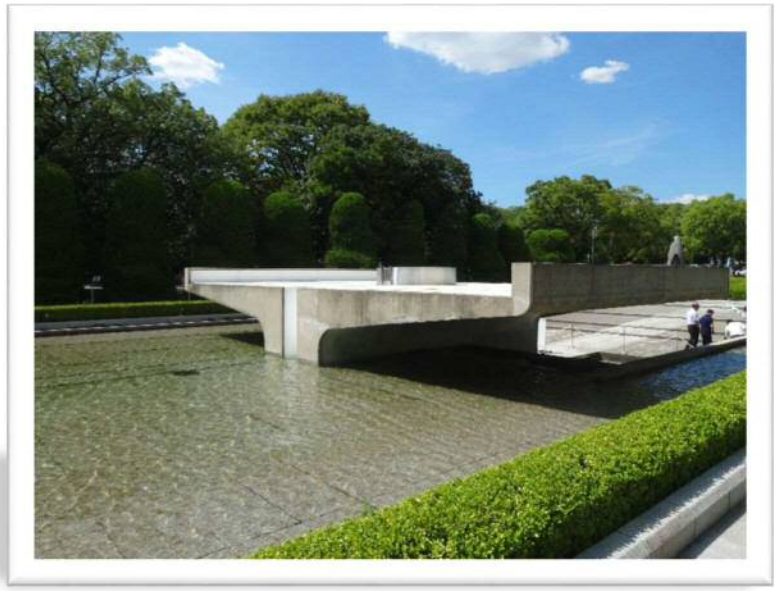
新津第二中学校　渡部　莉子

私は、８月５日から７日まで、広島派遣事業に参加してきました。この研修で、平和についてたくさんのことを学ぶことができました。その中でも私が印象に残ったことは二つあります。

一つ目は、原爆の恐ろしさです。広島に投下された原爆はリトルボーイという核兵器で、世界で初めて実戦使用されたものです。この一つの核兵器で推測十四万人というものの命が一瞬でうばわれてしまいました。今も、放射線の影響で苦しめられている方々が多くいるという話も聞きました。今もなお、こうやって苦しんでいる人がいることを忘れてはいけないと思いました。

二つ目は、平和公園にある「平和の池」です。水がほしいと言いながら亡くなってしまった人が多くいたと聞きました。思う存分水を飲んでくださいということで、平和の池が造られたそうです。またそこには「平和の灯」というものもあります。灯は、世界から核兵器がなくなるまで燃え続けているそうです。一刻も早く世界から核兵器がなくなり、灯が消えることを願いたいです。

この研修で学んだこと、感じたことを、私は今後忘れることなく、少しでも多くの人に知ってもらうことが大切だと思います。今後、世界を平和にしていくために行動していきたいです。



３　参加外国人留学生による感想文

平和記念式典研修感想

何　念

広島に降り立ったとき、他の日本の都市とそれほど違わないと思いました。高層ビルがたくさんあり、路面は清潔で整然としていました。しかし、バスから原爆ドームを見たとき、広島は特別な存在だと思いました。

ボランティアガイドさんから慰霊碑のデザインの意味を教わりました。今はとても綺麗な平和公園、原爆ドームは74年前のあの日破壊されました。広島平和記念資料館を見学して、映像や写真、説明が印象に残りました。「むごい」「怖い」だけでなく、「戦争をしてはいけないんだ」「人の命の温かさは素晴らしい」ということを感じました。原爆被害者の禎子さんの人生を通じて、「生きていること」「命の大切さ」を感じました。原爆被害者から直接話を聞いて、被害者さんたちは言葉と原爆症の傷から自分の人生経験を伝えてくれました。被害者さんたちの話を全ては理解できませんでしたが、その伝えたい気持ちをとても感じました。身体の負傷は74年前のその日何が起こったかを物語っているように感じました。74年後、被害者さんたちにとって原子爆弾の怖さはまだ記憶に新しいと感じました。私たちはその時代を経験しておらず、被害者さんたちの痛みを完全に共感することはできません。しかし、平和時代の幸せを感じています。

平和時代を守るために、お互いに交流をしていくことが大切だと思います。人は他者と自分との間の考え方や生活習慣が違うため、自分自身が正しいと感じていることだけを基準とし，それ以外のものを誤りであるとみなす傾向があると思います。交流を通じて、情報や考え、気持ちをやり取りし、相互理解を得るのが良いと思います。国と国の間も同じだと思います、国によって宗教、文化、価値観などいろんな違いがあるので、お互いに交流することが大切であると思います。私は平和のために、中日交流の架け橋になりたいです。より多くの中国人に日本のことを知らせ、より多くの日本人に中国のことを理解してほしいです。中国と日本の相互理解を目指します。

中国語サロンの日本人の友達は、私がこのイベントに参加することがわかると、未熟な中国語で「外国の人に少しでも関心を持ってもらえるのは本当にうれしいし、ありがたいです」と言いました。こちらこそ、このイベントに参加する機会を与えてもらい本当にありがとうございました。

平和な世界を作ろう

余　璐

1945年8月6日、戦争を終わらせる手段として、アメリカは日本に原子爆弾を投下し、多くの人が犠牲になったことは中国の教科書で学びましたが、それ以外の原爆に関する情報は殆ど知りませんでした。今回、被爆地の広島での三日間の研修を通して、原爆・戦争および平和に対してより深い認識が出来ました。

一日目に、私たちは平和記念資料館に行き、数多くの展示物を見ました。被害者の写真と絵は特に印象に残りました。やけどで顔がパンパンに膨れ上がった人・顔面の皮膚が垂れ下がった人・目玉が飛び出た人・頭髪が抜けた人など、今でも目に浮かんできます。核兵器の残酷さ、あるいは戦争の残酷さは私の思った以上です。戦争の中では、勝利者はありません。苦しんでいるのは私たち普通の人間なのだと一層実感しました。

平和な世界を実現するために私たちは何をするべきでしょうか。二日目の午後、ワークショップでこのことを考えさせられました。これまで、きちんと考えたこともありませんでした。よく考えてみると、平和を求めるのは誰のためでしょうか。言うまでもなく、私たち自分自身のため、あるいは子孫後代のため、大きく言うと、命のためだと思います。そうなると、国と国、人と人の間に、平和な関係を作るためには何が必要でしょう？私の答えは相互理解です。現在の世界はもっと密接につながっています。お互いに接触が増えるに従って、摩擦も増えるでしょう。摩擦が出てくるとき、ひたすら回避するだけでは問題を解決できません。摩擦が生じたときはお互いに交流し、理解し合うのは上策です。中日両国を例として、両国は「一衣帯水」の隣国とはいえ、両国の国民はお互いに知らないことが多いです。私の身近な人の多くは本やマスコミを通じて日本のことを知ります。現地に行ったことがないし、もちろん当地の人と交流するわけにはいかないです。それ故に、知っている日本はただ表面的なものなので、日本に対する誤解も生じやすいと思います。だから、私は中日両国の架け橋になり、両国国民の分かり合いを促すように頑張りたいです。一人の力は小さいけれど、せめて私の周りの人々に日本のこと、または今回見学で感じた原爆の残酷さ、平和の大切さを伝えられれば、それだけでもうれしいと思います。

最後に、平和記念式典への派遣のチャンスをいただいた新潟市にお礼を言いたいです。今回の研修を通じて私たちは平和な社会で生きることができ、どれほど幸せなのか分かりました。

新潟市非核平和都市宣言

わたしたちのまち新潟市は，
日本海に面した湊町，また，実り豊かな田園地帯として発展してきました。
いま，市町村合併によって，新・新潟市に生まれ変わり，
水と緑に恵まれた魅力ある国際都市として，
本州初の「日本海政令市」を目指しています。

先の大戦で，わたしたちは，尊い生命や貴重な財産を失いました。
新潟市は，広島・長崎と並ぶ原爆投下予定地のひとつでした。原爆を怖れ市民が一斉避難した日もありました。
あれから60年。
わたしたちは，現在のわたしたちの暮らしが，戦争による多くの方がたの尊い犠牲の上に成り立っていることを
忘れてはなりません。そのことを後世に伝えていかなければなりません。

核兵器の廃絶と世界の恒久平和が，わたしたちの永遠の願いです。
しかし，いまだに世界各地で紛争が絶えません。
飢餓，貧困，差別，人権侵害，環境破壊‥‥，平和な暮らしを脅かすものが，世界に満ちています。
わたしたちの暮らす北東アジアでも緊張関係が続き，核兵器の脅威が強まっています。
わたしたちは，核兵器の不拡散，そして廃絶を強く訴えます。

わたしたちの安心で安全な暮らしを脅かす全てのものを無くすこと。
地球上の全ての人びとが，平和で豊かな暮らしを送ること。
地球全体が，共生互恵関係を築き，ともに繁栄発展すること。
それが，わたしたちの願いです。世界の人びとの願いです。
わたしたちは，そのために不断の努力を重ねていきます。

海のむこうは，友となる国ぐに。
わたしたちは，世界の平和のかけ橋となります。
子どもたちの未来のために，
わたしたちの暮らす北東アジアの人びとが，世界の人びとが手をとりあって，
日本海を「平和の海」に!

新しい新潟市誕生の記念すべき年に，
核兵器の不拡散，そして廃絶を願い，
環日本海の友好・交流の拠点都市として，
北東アジアをはじめ広く世界に向けて，
新潟市が非核平和都市であることをここに宣言します。

2005年10月10日　　新　潟　市

令和元年度
広島平和記念式典等派遣事業
令和元年１０月
発行　新潟市総務部総務課